

第222回 「元気に百歳」クラブ・俳句サロン「道草」の句会開催

梅雨です。スッキリとした天候は望めそうにもありません。慰めになるのは、朝早くから近くの公園まで来てくれて、しきりに鳴いてくれる小鳥たちです。「鶯」、「ほととぎす」、「きびたき」くらいしか、小鳥の名前は知りませんが、カッコウ科の小鳥「ほととぎす」が、鶯の巣に「托卵」することは知っていて、ほととぎすの哀しい習性は、この時期になると思い出します。「ほととぎす」の句としては、杉田久女の「銜して山ほととぎす欲しいまゝ」が、有名ですね。世に名句と言われるのは、こういう句を言うのだと思います。歳時記からいただいた知識です。

さて、6月の「道草」句会ですが、6月9日（金）に「新橋ばる一ん」202号室にて開催致しました。今回は下述の「兼題」に、通信句会で集まった合計51句が対象となる句会に、下述の13名が集まり、討議致しました。句会へ出席される方が、段々と増えてくるのはとても嬉しいことです。来月もよろしくお願ひ致します。

今月の兼題

兼題1 「紫陽花」

兼題2 「蠅」

兼題3 「当季雑詠＝仲夏・三夏＝」

今月の投句参加17名)

芦川創風さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、坂上まさあきさん、高瀬荻女さん、辻 柴楽さん、手嶋錦流さん、中島憧岳さん、原 晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然。

リアル句会への参加（13名）

創風さん、一光さん、和感さん、月草さん、明峰さん、栄女さん、荻女さん、柴楽さん、錦流さん、晶如さん、傘吉さん、多佳さん、白然。

今月の優秀句と天賞句

兼題1. 「紫陽花」

◎『紫陽花や生きる期限を生きる友』	多佳	天2㊄5
◎『七七日四葩の花の白きこと』	晶如	天2㊄5
◎『紫陽花が仏に勝る鎌倉寺』	柴楽	天1☆7
◎『紫陽花やベンチに忘れ赤帽子』	まさあき	天1㊄1
◎『あばら家に額紫陽花の立ち姿』	傘吉	㊄5
◎『風立ちて山あぢさゐの濃むらさき』	荻女	㊄5

兼題2. 「蠅」

◎『追へど寄る蠅が連れなる一人酒』	白然	天3☆10
◎『蠅飛ぶや新聞バット構へをり』	晶如	天2㊄8
◎『書き順のいまだ判らず蠅のとぶ』	荻女	㊄6

兼題3. 「当季雑詠（＝仲夏・三夏＝）」

◎『爆撃を思ひ出す日々植田澄む』	多佳	天2☆6
◎『平凡な日々こそ良かれ柿若葉』	明峰	天1㊄4
◎『主無き離島の社梅雨茸』	晶如	天1㊄4

- ◎『夏祭りセイヤの声はしぶきなか』 栄女 天1㉔3
◎『ゑんどうの煮ゆるにはひの夕べかな』 荻女 ㉔5

兼題1では、多佳さんの句「紫陽花や生きる期限を生きる友」が、天賞二つを獲得しました。罹患した病の重さを医師から聞き、「ならば、期限の日数を生き抜いてやろう」と、病に対決した友人を句にしました。天賞推挙のコメントには、同じ体験をした友人を持つ実感が述べられておりました。次に晶如さんの句「七七日四葩の花の白きこと」も、同じく天賞二つを獲得しました。七七日の法要を迎えて、ますます愛おしくなる故人への想いを四葩の花の白色に託した絶妙さ、心に刻まれる句でした。

次に柴楽さんの句「紫陽花が仏に勝る鎌倉寺」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。梅雨時は鎌倉の幾つかの寺院は、まさに参拝の大切さよりも紫陽花のことが多く語られることがあります。「本当だね」と読者は感じ、一票を投じたのでしょう。次にまさあきさんの句「紫陽花やベンチに忘れ赤帽子」が、天賞一つを獲得しました。こうした忘れ物を取り上げられる句は多いのですが、紫陽花と赤帽子の対比に読者は感じるところがあったと思われます。天賞推挙のコメントにも「どんな赤帽子を忘れたのか、想像が膨らむ」とありました。

次に賞からは漏れていますが、傘吉さんの句「あばら家に額紫陽花の立ち姿」が、高得票を獲得しました。ご案内のように額紫陽花の咲き方は、随所に花を開花させ、それぞれの花が立ちあがっている感じがあります。傘吉さんはその姿を捕らえたと思いました。もう一つ、荻女さんの句「風立ちて山あぢさゐの濃むらさき」も、同じく高得票を獲得しました。この句は紫陽花を「山あぢさゐ」と平仮名で表現したこと、更に「濃むらさき」と、花の色を濃くしたことで、自然に育った野生の紫陽花を、読者に想像させることに成功していると思われます。

兼題2では、白然の句「追へど寄る蠅が連れなる一人酒」が、天賞三つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。天賞推挙のコメントの中に「レトロなところが好い」との評をいただきました。また、作者が蠅への対応に、一種の親しみを感じて下さっているコメントもあり、大満足です。有難うございます。

次に晶如さんの句「蠅飛ぶや新聞バット構へをり」が、高得票の天賞二つを獲得しました。新聞紙を細長く巻いてバットに仕立て、蠅をボールのごとく打つ様子は、多くの方の身に覚えのあることではないでしょうか。面白い仕上がりになりました。

次に賞からは漏れましたが、荻女さんの句「書き順のいまだ判らず蠅のとぶ」が、高得票を獲得しました。教室内でも大いに話題になり、何方かが蠅の書き順を調べて持ってきて下さいました。19画数、擬えているうちに、日本語の面白さに出会いました。

兼題3では、多佳さんの句「爆撃を思ひ出す日々植田澄む」が、天賞二つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。まだまだ戦時中のことが頭を過ることが多い日々です。あの終戦日の真っ青な空は忘れませんし、疎開先の田の澄んでいたことも忘れられません。読者も同じ気持ちになって一票を投じたのでしょう。次に明峰さんの句「平凡な日々こそ良かれ柿若葉」が、天賞一つを獲得しました。季語の「柿若葉」が、主役として生かされています。柿若葉の緑の力強さと、艶々とした光が見えてくるようです。

次に晶如さんの句「主無き離島の社梅雨茸」が、天賞一つを獲得しました。この句は季語の「梅雨茸」が、詠まれた句の中で活かされているのでしょうか。雨や湿度で増殖する菌の総称とも言えるのではないのでしょうか。不気味さが漂います。何か生き活きとしたものが欲しくなりますね。次に栄女さんの句「夏祭りセイヤの声はしぶきなか」が、天賞一つを獲得しました。夏祭りの元気いっぱいの威勢が「セイヤ」の声で表現されています。水をぶっかける祭り聞いて、楽しくなりました。作者からは、小さな声で「私たちの若い時代には、掛け声が「セイヤ」とは言わなかったと・・・。

もう一句、荻女さんの句「ゑんどうの煮ゆるにほひの夕べかな」が、賞からは漏れましたが、高得票を獲得しました。中七、下五で「煮ゆるにほひの夕べ」と、リズムの良いフレーズで綴り、それが「ゑんどう」を煮た香りであったとは……。作者はフレーズ選びに難しさを感じられたのではないのでしょうか。

先月から私たちの句会の進め方について、ディスカッションをしていますが、正式に句会のテーマとして取り上げ、ディスカッションするのは、初めてでした。先月のこの欄でも申し上げた通り、兼題の提示のない句会、つまり、自分自身で歳時記を読み、自分の詠む句の季語を自分で見つけ、句を詠むこと。これを実行していこうではないかと申し上げました。

私たち20名に近いメンバーは、俳句サロン「道草」には、いろいろな経緯を辿って参加しています。俳句サロン「道草」に、期待するものも一緒とは限りません。まずは当季雑詠の気持で、自由題3句を詠んで、本間傘吉さん、若しくは森田多佳さんに投句すること。これがファーストステップです。そして、受信した「投句一覧表」から選句し、リアル句会に臨む。これがセカンドステップです。

リアル句会に出席できない人は、選句結果を本間傘吉さんか、森田多佳さんに送信する。このステップを踏んで、句会を楽しもうと言う仕組みです。問題はあるかも知れませんが、問題と感じた時点で、皆さんで相談をする。単純でも、これが私たちの問題解決の方法です。どうかよろしくお願い致します。

(白然記)